

縄跳びやコマ回しに挑戦の日々

年長 たか1組



10月から始めたことの中に縄跳びとコマ回しがあります。道具は個人持ちで何時でも遊べるようにクラスに置いてあります。「縄跳びやろー」「コマやろー」と、子どもたちは声掛け合って園庭に出ていきます。どちらも子どもの遊びとして昔から在り、縄跳びは誰でも経験してきていることでしょう。

どちらの遊びも道具を使いますよね。コツをつかむことが必要で、出来るようになるまでに案外と時間がかかったのではないのでしょうか。手先の操作技術だけでは縄は跳べないし、コマは回りません。真っ直ぐに跳び上がる、同じ場所で跳ぶ、タイミングよく跳び上がる、手首を返すなど、リズム感や総合的な身体能力が必要です。子ども達はそのような動作を理屈として頭で考えているのではなく、見様見真似でやってみて「あれ？」とうまくいかないことに気が付きます。頭には跳んでいるイメージはあるけれど何で足に引っ掛かるのかな、と課題にぶつかるのです。とにかく縄を回し地面に叩きつける、跳び上がるけれど足に引っ掛かる、という一連の動作を何度も何度も繰り返します。やっと縄が後ろに回った時には「跳べた！」と声



があがります。この時の笑顔はもうこぼれ落ちそうで、応援している子どもたちもニコニコしています。簡単ではないことに意味があるのです。

同様に、コマ回しも簡単ではありません。紐を巻くことから難しいのです。コマを持っている方の手首を回すということがつかめれば、紐巻きの進みは俄然、早まります。大抵は紐を巻きつけることに必死になりますが、紐を持つ手よりコマを持つ手を自由に動かせるようになると、巻きは完成に近づきます。ここを過ぎればあと少しです。コマを投げるタイミングをつかむまで、練習を繰り返します。縄跳びにもコマ回しにも技はたくさんあるので、挑戦の日々は続きます。



白梅幼稚園にはコマ回しの文化があり、年少組の子どももコマを手にして「巻いて」と、近くにいる大人に声を掛けて遊ぶ姿が見られます。個人技が出来るようになり年長組になった時には、仲間の中で誰が一番長く回せるか、「一こつ出たり」「二こつ出たり」と勝負の遊びも始まります。子どもだけではなく大人も一緒に楽しめます。私は負けてばかりで、「先生下手だね」と言われ奮起しています。

ところで、縄跳びでは、たまに前回しよりも後ろ跳びの方を早く跳べるようになる子どもがいます。「反対の方が跳べた！」と大喜びし、周りも「すごーい」と言って拍手を送ります。肩の返しやタイミングが取り易いのでしょうか。容易ではないことの意味を改めて考えます。子ども時代に何を体験して欲しいかと。

(教諭・高橋敬子)



生きものと森の世界

年少 すみれ組



すみれ組の天井まで枝を大きく広げた一本の木。くだものをかいて切り、壁に貼り続けていた子が「くだものは、木になっているよ」と話したことから、木づくりが始まりました。一本一本、紙を丸めて色を塗ります。「葉っぱもある」と葉を絵の具でかき足すと、やりたい子どもたちが集まってきて、「指でポンポン」「手のひらでペタペタ」「筆でヌリヌリ」しています。かき方が変わると葉っぱに勢いがでてきて、ダイナミックな木になっていきました。見ていた虫好きの子どもたちも「木には虫もとまるんだよ」とそれぞれお気に入りの虫をかき、くだものだけでなく虫も仲間入りして、木は賑わいを増します。「木はも〜っと大きいんだよね」と声もあがり、枝があちらこちらに伸びはじめていくと、「いいね」「森みたいだね」と子どもたちのイメージがより膨らみます。恐竜のたまごを温めていた家も森にお引越し。恐竜たちが家の周りで遊び始めると、しばらくして空き箱でつくった虫も仲間と一緒に戦いの場を求めてやってきました。



ある日、部屋に入ってきたアリを見つけ、「アリをつくろう」と子どもたちは勢いづきます。新聞紙で頭と胴体をつくり、手足をつけたところで「やっぱり、ノコギリクワガタにしよう」「オオクワガタ」と見立てが変わります。その虫たちも加わり、さらに大型積み木で住処を作り、森も大賑わいです。恐竜の家と虫の住処を分けることになり、それぞれダンボールで草をつかって囲いをつくります。さらには「隠れ家がほしい」と虫の住処(後に虫の町)に子ども1、2人が入れる隠れ家も増えました。

かいたりつくったりしたもので遊んでいくなかで、子どもたちの気付きも増えてきました。イメージしたものが少しずつかたちになることを面白がり、見立てを変化させたり、仲間の声に耳を傾け「いいね」とつながったりして、遊びの世界が広がってきています。

とはいえ、部屋に生きているクモやトンボが入ってくると相変わらず、子どもたちは大騒ぎしています。木や草には更に虫を捕まえるためにクモの巣を吊り下げたり、お母さんトンボをつかって、トンボがまた飛んでくるように願ったりして、現実の世界も重ね合わせながら、子どもたちの世界観はどんどん広がっています。
(教諭・佐藤 恵)





こどもがつくる世界

第55回
2021.11.20



子どもは、ものをつくりながら、別の何者かとしてもう一つの世界をつくり生きています。刀をつくっているときには忍者の世界の、電車や線路をつなげているときには鉄道の世界の、家やミニチュアの家具や人形をつくっているときには自分たちの街の世界の、住人です。

11月20日には遊びながらつくった世界をご覧いただきました。子どもたちは互いのクラスの世界を歩き来し遊び込み、いくつもの世界を楽しみました。つくって見せて終わりというわけではありません。ものをつくりながら世界をつくり、遊びながら世界をつくりかえていくところに、本園の「こどもがつくる世界」の特徴があります。

世界のつくり方には発達が目まぐるしく進みます。年少組(写真左)は忍者やお姫さまやお寿司屋さんや森の住人になりきり、ごっこ遊びの拠点を形成し、遊びを深めていきました。年中組(写真下)は自らのイメージをかたちにすることと、かたちづくられたものからひらめきを得てイメージを膨らませることを行き交わせながら、仲間とともに世界を拡張していきます。年長組(写真右)は、自らの制作物をこだわって作り込むと同時に、それを俯瞰して、クラスや学年でつくる世界との調和を考えます。全体を見ながら配置を考え、再度、制作物をつくり込みます。

こどもがつくる「もの」にも「世界」にも物語があります。制作過程で工夫したことや苦勞したこと、諦めずにかたちにしたことなど、子どもにはかけがえのない体験の物語です。また、制作物を活かした遊びの世界の様子も子どもにとっては何日も時間をかけた物語です。それらは同時に、子ども自身が「いま」を存分に生きていることの証としての物語でもあります。改めて写真でお振り返りください。(本山方子)

